

序章 子どもの自殺者数はなぜ過去最多を記録したのか

少子化にもかかわらず増え続ける子どもの自殺

2024年の1年間に自殺した小中高生のが、529人だと発表された（警察庁統計確定値、外国籍を含む日本国内在住者）。職業別自殺者数を統計し始めて以来、過去最多になった。また3年連続で500人を超えたことになる。

この数字は、教育や児童福祉、心理学、自殺対策に関係する人たちに衝撃を与えた。少子化が進んでいるにもかかわらず、この時期になぜ子どもの自殺が増えるのか？警察庁の自殺統計によると、大人の自殺者数は減少傾向だが、どうして10代だけ自殺者が増えているのか？一言でその原因を特定できるようなものは見当たらなかった。

こうした増加傾向を聞き、筆者の頭に浮かんしたのは、21年5月に東京・新宿歌舞伎町のホテルから飛び降りた2人の少年少女のことだった。翌日以降、2人が亡くなった現場を訪れるよ

うになった。新宿で居場所を見つけた2人がなぜ死ななければならなかったのか、その理由を
探るためだ。

10代自殺の象徴「トー横」のリアル

2023年夏。新宿・歌舞伎町の「シネシティ広場」周辺、通称「トー横」には、10代の若
者たちも多く集まっていた。ここは、以前はコマ劇場前広場と呼ばれ、今と同様に多くの若者
たちが集う場所だった。筆者も昔はその広場で朝まで過ごし、そこで見知らぬ人たちとお酒を
飲んだり、夜通し話をしたりした。

「シネシティ広場」は「新宿東宝ビル」の横（西側）に位置し、子どもたち、若者たちが多く
集まる。「新宿東宝ビル」の横だから、いつしかその場所は「トー横」と呼ばれるようになった。
た。

もともと、コロナ禍が始まった20年当初、ここにはSNSのTwitter（現在のX、以下同）や
Instagram、TikTokで写真や動画を撮り、投稿していた人たち、通称、「自撮り界限かいわい」と呼ば
れる若者たちが集まっていた。「新宿東宝ビル」東側の、「I♡歌舞伎町」という電光掲示板が
あるビルを背景に撮影していたことも、その場所が知られる理由になった。

当初、トー横は、「新宿東宝ビル」の東側の路地を指していた。周辺に集まる子どもたちは、



歌舞伎町の大人たちから、「お店で飲むお金を持っていない」などの理由から、いつしか、「トー横キッズ」と呼ばれるようになっていた。その「トー横キッズ」を相手に淫行をして逮捕される人が出たり、未成年飲酒や市販薬・処方薬のOD（オーバードーズ・過剰摂取）が流行したりした。その後、都や警察当局は、若者が路地に集まらないように呼びかけた。また、座れないように「鳥よけシート」を設置した。

ただ、その場所にいる10代、20代の層の特徴が変わってきた。コロナ禍で行き場のない若者たちが集まってくるようになったのだ。そして路上で遊んだり、飲酒をしたりする姿をSNSに投稿するようになっていく。そこで話題になった人たちと仲良くなりたいたと、次々に若者たちが集まってきた。家で虐待されていたり、学

校でいじめや体罰、不適切指導、性被害を受けていたりする人たちも自然発生的に増えた。

「トー横四天王」を名乗るリーダー風情の人たちも現れた。

そんな背景の中で、トー横キッズが自殺をしたというニュースが流れた（警察統計上は必ずしも「自殺」となっていないケースもある）。前述のように21年5月、トー横で知り合った10代の男女2人が、近くのホテルから飛び降りて死亡した。筆者がトー横の取材を始めるきっかけになった出来事だ。現場に来て手を合わせたり、花を手向けたりする姿がどこにもない、という報道もあったが、現場に花が置かれているのを見かけた。

小倉將信^{まさのぶ}内閣府特命担当大臣（子ども政策担当）は23年7月3日、「トー横」を視察した。トー横は、10代の子どもたちの居場所であると同時に、未成年者との淫行事件、傷害事件、詐欺事件などに巻き込まれる場所としても知られるようになっていた。傷害致死事件にまで発展することもあった。小倉大臣は、トー横に集う当事者の10代の男女や支援団体に話を聞いたり、トー横を歩いたり、説明を受けたりした。

23年4月、「東急歌舞伎町タワー」が新たに建設され、開業した。ここは「シネシティ広場」の西側に隣接している。そのため、観光客をはじめとする人の流れが変わった。タワーの上層階まで上がると、これまで見るできなかったような景色を見下ろすことができる。タワー内にある映画館は、通常の鑑賞代よりも高額になっている。レストランやバーもあるが、歌

舞伎町内のほかの居酒屋と比べると、高級感があり、客もラゲジュアリーな層が多い。

タワーの利用客の中には、地雷系（精神的に不安定で愛情表現が重く、病みカワイイ系）といわれる。ピンクや黒、紫などダークな色を基調にロリータ、ゴスロリ系をアレンジしたファッション。地雷系には相手にしないほうがいいというニュアンスが含まれる）や量産型（地雷系と同じく、ロリータ、ゴスロリ系をベースとしたファッションだが、地雷系に比べると、やや明るい印象。白やベージュなど柔らかな色を基調とし、流行を取り入れている）のファッションに身を包んだ中高生と思われる少女も紛れ込んでいる。一緒にいるのは同年代の少年だったり、年上の男性だったりする。一見すると客層に合わないもので、浮いている感じを受ける。

23年8月にも、10代の女性が歌舞伎町内の、トー横から少し離れた場所にあるホテルから飛び降りて死亡した。遺書もなく、明確な意図を持った自殺かどうかはわからない。筆者も、トー横に来ていた彼女と何度か話をしたことがあったが、挨拶程度だったため、彼女の悩みなどを直接聞いたことはない。

しかし、彼女を慕う10代の男性によると、兄からの性的虐待の経験があったようだ。そうした話は、自身のTwitterにも書かれていた。また、匿名掲示板「雑談たぬき」でも彼女が受けた性的虐待のことが話題になっていた。「たぬき」はもともとビジュアル系バンドに関する情報交換やファン同士の交流の場だった。それ以外の雑談も書き込まれており、トー横界限の

こともたびたび話題になっている。

亡くなった女性は、自殺行動を取る勢いをつけるためにODをしたのか、あるいは、ODをしたために自殺衝動に駆られたのか、ODの結果として意識的にホテルの上階に上がり、自傷的な死、もしくは事故的死につながったのかはわからない。

24年8月から9月にかけては、前出のホテルから5人が転落し、亡くなった。いずれも自殺と見られている。9月に亡くなった2組4人は男女による心中の可能性もある。このうち、1人の男性は、「男女問わず、誰にでも優しい」との評判だったが、違法薬物の常習者であり、体がガリガリに痩せている写真とともに「プレイヤーログアウトのお知らせです」と投稿していた。

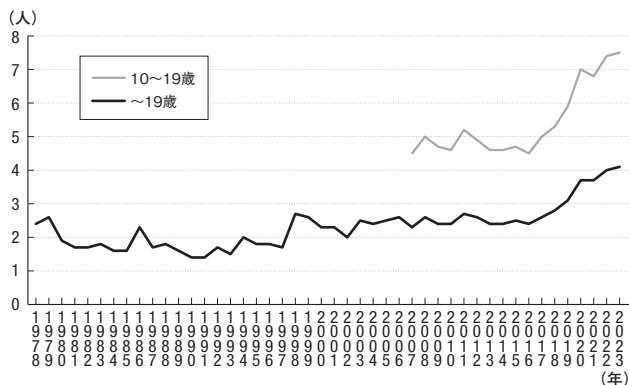
子どもの自殺はどんどん増加している

近年は子どもの自殺の増加が目立つ。それは今に始まったことではない。厚生労働省の「自殺対策白書」で見えてみると、2007年と比べて、23年の時点で10代の自殺死亡率（10万人あたりの自殺死亡者数）は、4・5から7・5となり、1・7倍増加した。このうち男性は5・4から7・8と1・4倍増となった。一方で女性は3・5から7・2となり、約2倍増えたことになる。

Figure 1: Number of people aged 19 and under in the city of Matsuyama (in thousands of people).

Year	Number of people (in thousands)
1977	900
1978	920
1979	700
1980	650
1981	620
1982	600
1983	650
1984	620
1985	580
1986	550
1987	800
1988	600
1989	580
1990	600
1991	550
1992	500
1993	450
1994	450
1995	520
1996	450
1997	580
1998	550
1999	520
2000	720
2001	700
2002	600
2003	580
2004	500
2005	620
2006	580
2007	600
2008	550
2009	580
2010	620
2011	580
2012	550
2013	550
2014	520
2015	550
2016	520
2017	550
2018	600
2019	650
2020	780
2021	750
2022	780
2023	800

20歳未満の自殺死亡率



〔令和6年版自殺対策白書〕参考資料より作成。参考資料は警察庁自殺統計原票データ、国勢調査実施年は総務省「国勢調査」（2015年以前は年齢不詳の人口をあん分した人口、2020年は不詳補完値）、ほかの年は総務省「人口推計」より厚生労働省が作成したもの。

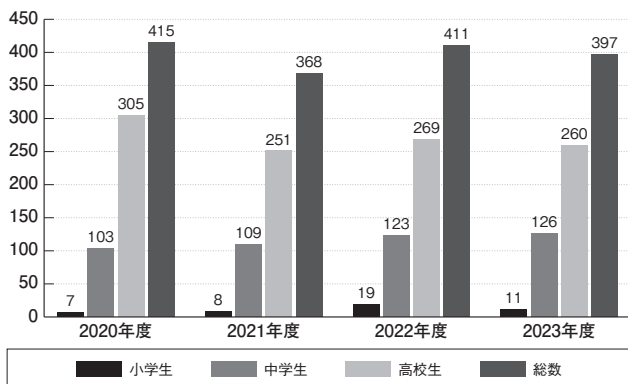
ここ数年もコロナ禍で子どもの自殺が目立った。特に20年は高校生女子の自殺者は前年の2倍になった。しかし、コロナ禍のみが要因ではなく、コロナ禍は子どもの自殺の増加傾向を可視化したにすぎないのではないかと、筆者は考える。

最新のデータを見てみよう。

文部科学省は毎年10月、「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（以下、問題行動調査）を発表している。現在の調査対象は国公私立の小学生から高校生だ。「自殺」は74年から学校を通じて調査している（当時は文部省が調査）。当初は公立の中学と高校のみが対象だったが、77年からは公立の小学校も含めている。2006年度からは、国立も私立も調査対象となり、13年度からは、高校の通信教育課程も含むようになった。その意味では、データの範囲が一律ではないために単純な経年比較はできない。

それを前提にすると、2020年度に学校が把握した自殺者数は小中高生合わせて415人で過去最多だった。高校生のみで300人を超えているのは、23年度までにこのときだけだ。最新23年度のデータでは、小中高生合わせて397人。過去3番目の多さだ。中学生（126人）は過去最多となった。高校生（260人）も過去4番目の多さである。この時代に、なぜ小中学生の自殺が増えているのか。なお、文科省調査の数字は、警察庁の統計よりも少なく算出されている。

児童生徒の自殺者数の推移



文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（令和2年度～令和5年度）より作成

過去に子どもの自殺が目立ったのは、86年。この年、中学生男子がいじめを理由に「生きジゴク」になっちゃうよ」と遺書に書き残し、駅ビルのトイレ内で自殺した。また、松田聖子2世と呼ばれたアイドル・岡田有希子が所属事務所ビルから飛び降り自殺をした年でもある。この年は連鎖自殺が相次いだといわれる。このときは小中高合わせて268人だったが、23年度はその1・5倍の自殺者数だ。

しかも、23年度のデータを見ると、小中高ともに、女子の自殺者数が男子を超えていることがわかった。一般には、男性の自殺者数が女性の自殺者数よりも多い。なぜなら、男性は悩みを周囲に相談しない傾向があり、かつ致死性の高い自殺関連行動を取るためとも言われているからだ。

しかし、中学生で女子の自殺者数が男子を上回る傾向はいつからなのか？と思ひ、過去のデータを見てみると、19年度は男子が46人で、女子の45人よりも1人多いが、20年度は男子48人に対して、女子は55人と逆転。以降は、女子が多い傾向が見られる。これまでのデータを覆した。^{*1}なぜなのだろうか。理由は後述する。

22年は新型コロナウイルスの感染拡大が続いていた時期だ。コロナ禍で人間関係のあり方が変わり、リモートで授業が行われたことの影響で自殺者数が増えたといわれている。

芸能人などの自殺報道があると、「鬱」「うつ病」「不安」「悲しい」などの不安を示す言葉や、「自殺サイト」や「自殺方法」、あるいは「死にたい」などの念慮を示す言葉のインターネットでの検索数が増加することがわかっている。コロナ禍は芸能人の自殺やその可能性のある出来事が続き、瞬間的な関心の高まりと、自殺報道による思い出し効果があったのではないかとの分析もある。^{*2}報道に接したことで過去の経験を想起させ、「自分ごと」として捉える「自己関連づけ効果」（自分に関連させて処理すると、他者と関連して処理した場合よりも記憶が促進されるということ）があったということだろう。そのためか、過去の不安な感情まで思い出し、関連語を検索する行動が見られたのだろう。

ただし、コロナ禍を通じて、10代に大きな影響を与えたものが明確にあったかといえは不明だ。コロナ禍という理由以外のものは誰もが想像しにくい。しかし、コロナ禍だけで説明でき

ないことはデータ上、明白だ。なぜなら16年から、自殺者数は増加傾向を示しているからだ。

警察庁の統計によると、日本では、98年から2011年までは、全年代の年間自殺者の総数が3万人を超えていた。自殺対策基本法ができた06年以降は、中高年の男性を中心に自殺者数が減っていく。しかし、児童生徒の自殺者数は減少せず、むしろ、増加傾向に転じた。児童生徒の自殺者数は11年が多く、353人だった。12年からは全年代を合わせて3万人を割ったが、児童生徒の場合は増加傾向に変化はない。

16年には自殺対策基本法が改正され、学校現場に対して、「SOSの出し方に関する教育」が推進されていく。また、希死念慮を持つ男女が殺害された座間男女9人殺害事件が起きた17年以降、厚生労働省は、SNSによる自殺相談を充実させた。しかし、小中高生の自殺者数を見ると、16年以降、それまでの増加傾向を抑えることができず、警察庁統計で、20年に初めて400人を超え、22年以降は3年連続で500人を超えた。

理由は何だったのか。前述の文科省が発表する問題行動調査には、「自殺した児童生徒が置かれていた状況」という調査項目がある。選択肢には「家庭不和」「学業等不振」「いじめの問題」などがあるが、半数ほどが「不明」で、23年度は、その割合が46・9%になった。中でも、小学生は63・6%だ。学校側は、児童生徒がなぜ自殺したのかを把握できないでいる。把握しない・したくないという心情も見え隠れする。